

# 「ドイツ記念碑」と日新館の教育

—会津の中のドイツ—

九頭見 和 夫 (ドイツ語)



飯盛山の「ドイツ記念碑」

## 1. はじめに

会津若松市の市街からさほど遠くないところに小高い丘ともいえる海拔 360 m の飯盛山がある。この山は、戊辰戦争（明治 1 年＝1968）の時会津藩の少年武士白虎隊の隊士 19 名が自刃した場所としてよく知られ、この時以来歴史の町会津を語る際には必ず登場する地名となっている。

15 年前の昭和 48 年、初めてこの地を訪れた私は、何げなく見た黒花崗岩の石碑にドイツ語の文字を発見し驚いたが、これが昭和 10 年（1935）にドイツ人ハッソー・フォン・エツドルフが寄贈したいわゆる「ドイツ記念碑」で、その隣りに立つ赤花崗岩の古柱が昭和 3 年（1928）にイタリアのローマより贈られた「イタリア記念碑」である。この二つの記念碑と、香煙立ちのぼる白虎隊士の墓、さらにはさざえ堂などとの組合せが何とも表現しがたい独特の雰囲気をかもし出していたことをおぼえている。この時の体験をもとに数年前日本科

学会議福島支部ニュース「JSA ふくしま通信」に、この「ドイツ記念碑」を第三帝国の一武官によって寄贈されたナチス時代の遺物として紹介した。ところが昨年（昭和 62 年）、4 月 10 日付の「福島民友新聞」等から、この記念碑の贈り主が実は寄贈当時駐日ドイツ大使館付書記官であったことが判明した。記念碑にそえられた説明文をよりにどこに安易に紹介したことの後悔の念と新たに生じた記念碑に対する興味とから、文部省の在外研究員として西ドイツに行く機会を利用し、寄贈した本人より直接記念碑寄贈にまつわる話を聞いた。以上がこの論文を書くに到った経緯であるが、さらに会津を調査した結果、会津と例えばドイツとを結ぶ糸が「ドイツ記念碑」以外にもいくつか見い出され、歴史の町会津の名は決して東北の一地域に限定されない広範囲に通用する地名であることを知った。例えば東京高等商業学校（現一橋大学）、慶応大学、学習院大学で 22 年間にわたって教鞭をとり、帰国後ヨーロッパで白虎隊を紹介し（『日本忠勇物語』Über Loyalität in Japan）、死後飯盛山に埋葬されたリヒャルト・ハイゼ、戊辰戦争当時の会津藩の軍事顧問で後に戊辰戦争生き残りの会津藩士や早乙女貢の小説で紹介されている「おけい」とともにアメリカのカリフォルニアにわたり、かの地に「ワカマツ・コロニー」を設立したヘンリー・スネル、第一次世界大戦時にドイツ兵捕虜を収容した四国の板東捕虜収容所で陸軍省の叱責をものともせずドイツ兵捕虜を「武士の情」を口実に人道的に扱った収容所所長の会津人松井豊寿、などの人たちである。なおこの松井豊寿の扱いに感動した元ドイツ兵捕虜たちは、帰国後「板東を忍ぶ会」を結成しこれをきっかけに現在北ドイツの町リュエネブルクと鳴門市は姉妹都市となり交流を続けている。

この論文においては、まず「ドイツ記念碑」についてエツドルフの寄贈から今日までの約 50 年

間の歴史を記述し、つぎに白虎隊をヨーロッパに紹介したハイゼについて報告し、最後にこの二人のドイツ人と白虎隊とを結びつけたものは何か、この謎を解明するため自刃した19名の白虎隊士のうち17名までが学びその思想形成に大きな影響を及ぼしたと思われる日新館の教育にドイツの教育を関連させ分析を試みる予定である。

## 2. 「ドイツ記念碑」の歴史

まず最初に「ドイツ記念碑」を紹介すると、白虎隊士の墓のある広場の南側に位置した、横50cm、たて66cm、奥行き24cmの長方形の黒花崗岩で、碑の表面に以下のドイツ文とマーク（十字章）が刻まれている：

EIN DEUTSCHER /  / DEN  
JUNGEN RITTERN VON AIZU /  
1935

隣りのイタリア記念碑と比較すると、碑全体が小柄で極めて質素な印象をうける。ちなみに「イタリア記念碑」は、白大理石の上にポンペイの遺跡から発掘された赤花崗岩の円柱が立ち、最上段にブロンズの鷲の像がのった壮麗なもので、円柱だけでも高さ8m、重量25トンもある巨大な石である。贈られてきた当時カララの大大理石に刻まれた文字は、表面にはイタリア語で、「文明の母たるローマは、白虎隊勇士の遺烈に不巧の敬意を捧げんがため、古代ローマの権威を表す「ファッシスタ」党章のマサカリを飾り、永遠に偉大の証たる千年の古石柱を贈る」とあり、その裏面には日本語で、「武士道の精華に捧ぐ、ローマ元老院及び市民より。」とあったとのことであるが、第二次世界大戦後の昭和20年9月会津若松に進駐してきた占領軍によって「イタリア記念碑」もファッシズムの遺物とみなされ碑に刻まれた文字のみならずマサカリをもはずされ今日に到っている。

さて「ドイツ記念碑」に話を戻すと、碑文の日本語訳は、「一ドイツ人より / 会津の若き武士たちに（贈る） / 1935」となる。「会津の若き武士たち」が戊辰戦争で自刃した白虎隊士19名をさすことはだれにも明白であるが、問題は「一ドイツ人」とは何者かということである。寄贈主の名前がハッソウ・フォン・エッツドルフ（Hasso von Etdorf）であることだけは寄贈された当時から知られていたが、その経歴については、例えば昭和32年「戊辰戦役九十年祭」に

際して会津若松市役所が会津にかかわりがあると思われる著名人100人に対して実施したアンケートに対する駐日ドイツ大使ドクトル・ハア・クロールの回答などを通じておぼろげに知られていた以外は全く手がかりがなく、前述した如く記念碑が寄贈されて以来約半世紀後の昨年4月ようやく会津若松市在住の郷土史研究家宮崎十三八によって贈り主の経歴が解明されたのである。贈り主が当時身分を明らかにしなかったのか、それとも寄贈をうけた当時の財団法人会津弔霊義会の対応がきちんとしていなかったためなのか定かでないが、もし寄贈主が生存していなければと考えると解明に要した半世紀はいかにも長すぎる感じがする。この辺の混乱した事情を如実に物語っているとされるのが、碑文にそえられた日本語の説明文で、少くとも3度は変っている。参考までに説明文を修正を加えず原文のまま記すと、寄贈された昭和10年から終戦までの説明文はたて書きの簡単なもので、「ドイツの武士より会津の少年武士 / に贈る / ハッソフォンエッツドルフ」とあり、占領軍の命令で撤去され昭和28年に復元された後の説明文は横書きで、「フォンエッツドルフ氏寄贈の碑 / 昭和10年6月ドイツ大使館付武官 / HASSO von ETZDOR 大佐が白虎隊精神を / 讃美して贈られた碑文と十字章で / 碑文訳「会津の若き少年武士に贈る」一ドイツ人 / 第2次世界大戦後占領軍の手によって碑面を削り撤去された / ものを、昭和28年再刻のうえ復元されたものである。」とある。エッツドルフの経歴判明後の昨年設置された説明文も横書きで、「フォン・エッツ・ドルフ氏寄贈の碑 / 昭和10年6月ドイツ国（現ドイツ連邦共和国）大使館 / 政治担当外交官 Hasso von Etdorf 氏が白虎隊精神 / を讃美して贈られた碑文と十字章である。 / 碑文訳「会津の若き少年武士に贈る」 / 第2次世界大戦後アメリカ進駐軍の手によって碑面を削り撤去されたものを昭和28年再刻のうえ復元されたものである。」とある。以下これら三つの説明文にそって「ドイツ記念碑」の歴史を追うことにする。

昭和9年（1934年）の秋、ドイツ人ハッソウ・フォン・エッツドルフより記念碑建立のための寄付金を受領した財団法人会津弔霊義会は、会津若松市の石万（現石万建設）に発注し、翌年6月記念碑は完成する。しかしこの時すでに贈り主の

ツドルフはドイツへ帰国し、詳しい経歴は後に記すが、その後かれは現在に至るまで一度も会津若松市を訪れてはいない。従ってかれが記念碑を見たのはわずかに写真を通して、それもかれの住所が判明したごく最近のことと思われる。これらの記念碑完成時の事情が、碑文の「EIN DEUTSCHER」を説明文で「ドイツの武士」とさせたものと思われる。ヒトラーが1933年（昭和8）に政権を獲得し、第三帝国を樹立した直後という歴史的な背景も無関係ではなかったと思われる。1937年（昭和12）、日独伊防共協定締結。1940年（昭和15）、日独伊三国同盟締結。しだいに軍事色が増すにつれ、東北の一地方都市会津若松として例外ではありえなくなる。『福島県史 26』によれば、1938年（昭和13）にヒトラー・ユーゲントが飯盛山を訪れている。当時の状況を記した投書が昭和62年7月9日付「朝日新聞」のテーマ談話室（戦争）に掲載されたのでその一部を引用する。「ある日の放課後、巻紙に毛筆の礼状を私は書かされた。「…私の祖父は年齢が一つ上のため朱雀隊で戦って生き残りました。立派な荒鷲の像を頂き、白虎隊の少年たちも地下で喜んでいることでしょう」先生に指示された通り、ムソリーニ様と末尾に大きく書いて、やっとホッとした。昭和10年、駐日大使館付の独軍大佐から顕彰碑が贈られ、白虎隊の墓の向かいの荒鷲の像と並べられた。ヒトラー・ユーゲントもバスを連ねて墓参りにやってきた。ナチスの小旗を振って歓迎する沿道の人々の中に私もいた。やがて日独伊三国同盟が結ばれ、あの手紙も小さな役割を果たしたのでは、とひそかに考えたものだ。」（東京都 井上京子）大久保龍『白虎隊とその教育』によれば、「盟邦ドイツはそのヒトラー・ユーゲントの結成にあたって、白虎隊精神を取り入れ、同じくイタリアも、その青少年団の訓練のなかにこれを汲みとっている。」<sup>1)</sup>とのことである。かくして、「EIN DEUTSCHER」が「ドイツの武士」以外であることは、軍事色のこの当時の事情から判断して夢想だにされなかったであろうことが容易に想像される。さらに「ドイツの武士」は、記念碑が昭和28年に復元された時には、「ドイツ大使館付武官」で「大佐」にまでエスカレートする。この事については後に触れることにして、その前に第二次世界大戦終了直後の昭和20年（1945）9月、占領軍のニューヨーク部隊が会津若松市に進駐してきた時のことを述べ

たい。

会津若松市役所職員の案内で飯盛山にあらわれたアメリカ軍将校は、「イタリア記念碑」と「ドイツ記念碑」を「日独伊三国同盟」と関連させその取り扱いについて厳しい指示を発する：「イタリア記念碑」についてはすでにのべた如き指示によって撤去まではまぬかれるが、なぜか「ドイツ記念碑」については全面撤去し石碑の破壊を指示される。「ドイツの武士」が災いしたとみるのはうがちすぎであろうか。当時の事情を山口弥一郎はその著書『白虎隊物語』の中で、当時飯盛山の墓守をしていた飯盛ミヨセの話として紹介している。「しかしね、こんどの戦争がどうしたか知らないけれど、折角遠い国から贈ってくれたこの碑に罪はあるまいて。アメリカ軍は恐ろしかった。そむけば殺されるかも知れない。しかし、白虎隊は16、7才の子供ではないか。今のこの年頃の子供を見なさい。なんの気をして育てているのさ。それがお城が焼けおちた、殿様が亡くなられたと思って、喉をついたり、さしちがえて死んでいるではないか。このしわくちや婆さんの首などとんでもいいと思いましたよ。それでドイツから贈られた碑は家の側に持ってきてかくしておきましたのでさ。みて下されや。」<sup>2)</sup>また飯盛ミヨセの義理の娘にあたる飯盛史子によれば、「ミヨセが「子供がもらったものを大人がこわすとは何事か」と言って石碑の上にかぶさったのを見たアメリカ軍の将校がミヨセに石碑をくれた。」とのことである。この飯盛ミヨセについては、昭和27年（1952）秋、「新・平家物語」の取材に会津若松を訪れた吉川英治によって昭和28年3月発行の「週刊朝日」春季増刊号の「新・平家今昔紀行」の中でもとりあげられている：「まことに会津的なと思える素朴さと共に、会津人かたぎの一徹みたいなものが根づよく潜んでいる。人国記の筆者に云わせれば、ここの山川風土と長い封建のせいにするかも知れない。とにかく、愛すべき飯盛山のお婆さんではあった。若松市の名物婆さんとして市は可愛がってあげるがいい。」<sup>3)</sup>それではなぜ「ドイツ記念碑」だけが撤去・破壊を命じられたのか。同じファシズムの国家ではあっても早々と降服したイタリアに対してよりも最後まで頑強に抵抗したナチス・ドイツに対しての方がより憎悪の念がアメリカ軍将校の胸中で強かったとも考えられる。あるいは記念碑撤去命令が口頭による命令であったこと

から、通訳の誤解に基づく命令ではなかったかという推測を会津の郷土史研究家の中には抱く者がある。碑文の「EIN DEUTSCHER」が説明文で「ドイツの武士」になった例などを合せ考えるとこの推測が全く根拠のないものとも思われれない。いずれにせよ、結果として飯盛ミヨセに記念碑の処理をアメリカ軍の将校がまかせたことは、撤去命令が絶対的かつ厳格なものでなかったことだけは確かである。

破壊をまぬがれた「ドイツ記念碑」は、昭和28年在郷軍人会の人たちが飯盛ミヨセの所にやってきて文字やマークを削ったまま元の位置に復元されることになる。しかし記念碑建設当時のドイツ文字やマークが完全に復活するのは昭和30年以降のことで、その頃たまたま飯盛山を訪れた西ドイツの青年団が当時の金で一万円を財団法人会津弔霊義会に送ってきてからのことである。なぜこの時の説明文でエッツドルフの肩書が「ドイツ大使館付武官」でしかも「大佐」になったのか知りたいものである。

昭和32年(1957)9月、会津若松市役所は「戊辰戦役九十年祭」を催すにあたって会津にゆかりがあると思われる著名人100人に対して「戊辰戦役九十年に思う」と題したアンケートを実施する。もちろん100人の中には駐日ドイツ大使や駐日イタリア大使も含まれていたが、この駐日ドイツ大使ドクトル・ハア・クロールの回答から思いがけずエッツドルフの現況を知ることになる。以下回答の一部を引用する。『「白虎隊」の若い19戦士の英雄的志操につきましては、遠く日本の国境を越えて私の祖国にも知れ渡っております。1935年当時の在日ドイツ大使館員、現カナダ駐在ドイツ連邦共和国大使ハッソウ・フォン・エッツドルフ氏のこの若い19戦士追慕のあまり捧げまつた記念碑が再建されましたことは、私のかねて喜びに耐えないところです。このこともまた、日独両国の間には戦時戦後の混乱にも変わらずに緊密なるきずなが存在しているという事実を物語るものと存ぜられます。』<sup>4)</sup>しかし、エッツドルフの全経歴が地元会津の人の前に明らかになるのは30年後の昭和62年のことである。

エッツドルフの全経歴を以下に紹介する。

法学博士ハッソウ・フォン・エッツドルフの履歴書。

1900年3月2日西プロイセンのエルヴィング

(Elbing)に生まれる。ベルリートの王立フリードリッヒ・ヴィルヘルム・ギュムナージウムの生徒。ベルリン大学、ゲッティンゲン大学、ハレ大学で法学、歴史学、国家学を学ぶ。ゲッティンゲン大学法学博士。

1928年、ドイツ外務省に入省。1931年、東京駐在ドイツ大使館付書記官。1934年、ベルリン駐在帝国外務大臣フォン・ノイラート私設秘書。1936年、ローマ駐在ドイツ大使館付書記官。1938年、ベルリン駐在外務省筆頭参事官(局長補佐)。1939年、軍司令官付外務省局長。1945年、ジェノーヴァ駐在総領事。

1947年、シュトゥットガルト駐在、平和問題のためのドイツ事務局付協力員、最後にその事務局長。1950年、ベルリンに再開された外務省に局長補佐として入省。1954年、パリ駐在公使兼EDC(欧州防衛共同体)のための暫定委員会ドイツ派遣団代表。1955年、ロンドン駐在WEU(西欧同盟)事務局長代理。1956年、オタワ駐在ドイツ連邦共和国大使。1958年、ボン駐在外務省局長。1961年—1965年、ロンドン駐在ドイツ連邦共和国大使。

その後数年間ドイツ経済の顧問として活動。

現在バイエルンの田舎で生活。

二つの世界大戦に参加。

アイヒトリング(Eichtling), 1987年2月12日, D-8018, グラーフィング(Grafring)

ハッソウ・フォン・エッツドルフ(署名)

以上がエッツドルフの全経歴であるが、この履歴書でみるかぎり、かれが記念碑の説明文にあるようなドイツ大使館付武官、ましてやナチスの陸軍大佐であったことを示す文字は一つもなく、かれが外交畑一筋に歩んできたドイツの外交官であったことは明白である。このことは、私自身昨年(昭和62年)8月ミュンヘンの郊外グラーフフィングの自宅でエッツドルフ自身に確認済みである。それではここで「ドイツ記念碑」を会津に寄贈した理由も含めエッツドルフの現況を紹介しようと思う。

1987年8月19日、ミュンヘンからエス・バーン(S-Bahn=大都市と郊外を結ぶ電車)で約40分の人口約9千人の大変牧歌的なグラーフフィングの町にエッツドルフを訪ねた。家は平家建で、その外観は、バイエルン州によくみられるごくふつうの農家といった印象を受けたが、室内の装飾



ハツノウ・フォン・エッツドルフ  
(1987年撮影)

は、例えば数百年前の中国の掛軸やフランスのシャンデリアなど過去のはなやかな経歴を反映したすばらしいものであった。家族構成は、奥さんとお手伝いさんの3人、他に犬が2頭。かれはかなり背が高く、両手で杖をつき足が不自由なことと耳がやや遠かったこと以外は、年令(87才)のわりには声は大きくほりがあり元気であった。以下「ドイツ記念碑」に関する質問とエッツドルフの回答を一部再現する。

問 あなたは1934年会津の町を訪ねました。そして白虎隊の記念碑を贈りました。この記念碑を会津の人々は「ドイツ記念碑」とよび大変愛しています。あなたは現在でもなお会津の町をおぼえていますか。

答 もちろん、記念碑と会津のことはよくおぼえている。

問 それではいかなる理由からこの記念碑を贈ったのですか。

答 全く手短かに言うと、白虎隊は倫理感の象徴。尊敬と愛情から記念碑を贈った。

問 あなたは武官であったと日本では伝えられています。それとも書記官であったのですか。

答 私は外交官で、当時は書記官であった。

問 会津の市民はあなたが日本にこられることを強くのぞんでいます。その気持はおありですか。

答 会津に行きたい気持は非常にある、しかし、

87才なので…。

問 もし日本に行くことができたなら最初に何をやりたいですか。

答 私の人生で最もすばらしい時をすごさせてくれた日本の市民の方々にお礼がいたい。

記念碑を贈った理由と思われる文章が宮崎十三八あての手紙(1987年2月16日)にもみい出されるので引用する。「(私が)寄贈した白虎隊の記念碑でもって私は、栄光にみちた歴史に私が非常に感動したこと、私があなたの同郷の人々との深い結びつきを感じたこと、を表わしたかったのです。」

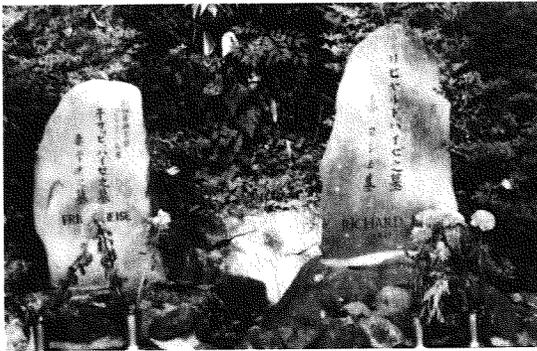
「ドイツ記念碑」寄贈の理由も含め何がエッツドルフと会津を結びつけたのか、会津とかかわりのあるもう一人のドイツ人リヒャルト・ハイゼについて紹介しその後さらに分析しようと思う。

### 3. ハイゼと『日本忠勇物語』

その著書『日本忠勇物語』(Über Loyalität in Japan)で白虎隊をヨーロッパに紹介したドイツ人リヒャルト・ハイゼ(Richard Heise)(1869—1940, 明治2—昭和15)とその妻ヨシの墓が飯盛山の南側斜面にある。まずその経歴を墓のかたわらに立つ「ハイゼ先生銘碑」によって紹介する(原文のまま、句読点のみ補足)。

「リヒャルト・ハイゼ先生は明治二年キール市に生る。同三十五年東京高等商業学校独逸語教師に聘せられ学習院及慶応義塾に教職を兼ね、子弟の薫陶に尽瘁すること二十有余年、功に依り勲三等旭日章を賜ふ。大正十三年帰国、満州事変に際し反日論起るや寿府に在りゾルフ前駐日大使と共に筆陣を張り之が是正に努む。晩年大連に在任、今春偶々北京に遊び病を得て長逝す。先生人格高雅闘士の風あり、夙に白虎隊の誠忠に感銘之を筆舌に載せて汎く世に紹介し、自亦飯盛山に眠らむことを遺言す。茲に先生を敬慕する友人門弟約四百名、若松市当局の協力を得て此地をトし先生の念願に応ふ。昭和十五年十一月十七日 ハイゼ先生記念事業会」

この経歴から判断すると、ハイゼは71年の生涯の22年間(1902—1924)を日本ですごしたことになる。以下『日本忠勇物語』の一部をなす『独逸人の見たる会津白虎隊』を参考に会津に関係する部分の経歴を補足する。1908年(明治41)夏、飯盛山を訪問。1930年(昭和5)、ハイゼ『独逸人の見たる会津白虎隊』を執筆しその原稿をジュネ



リヒャルト・ハイゼの墓(飯盛山)

ープで在ベルリン公使武者小路公共に示す。1937年12月、ハイゼ2回目の飯盛山訪問。ハイゼ死後の1941年(昭和16)、『独逸人の見たる会津白虎隊』(結城司郎次訳) 会津の飯盛寿々子によって発行される。これらの補足のうちハイゼが飯盛山を最初に訪問した日時についてはそれを明確に示す資料はないが、1) 前述の著書に「私は冥想の中で、その当時を去ること40年の昔の1868年に若松市内及び近郊で演じられたかくも戦慄すべき日本歴史の一部」<sup>5)</sup>とあり、「その当時」が文の前後関係からハイゼが初めて飯盛山を訪問した時をさすことが明らかであること、2) 1937年、2回目の飯盛山訪問の時ハイゼが飯盛正成のさし出した芳名録に記帳したドイツ文(Der erste Besuch vor ca 30 Jahren)によって最初の飯盛山訪問が約30年前であったこと、以上2つの理由から、ハイゼの最初の飯盛山訪問の日時を1908年と推定した。

さてドイツ人ハイゼと白虎隊を結びつけたものは何であったのか。以下ハイゼの白虎隊受容の過程を追跡してみたい。22年間の滞日中かれは当時の日本の有力な政治的指導者山県有朋、伊藤博文、井上馨、松方正義などと会う機会をもただけでなく、積極的に日本各地を旅行し、1908年(明治41)には友人アーサー・ロイド教授のすすめなどにより飯盛山の白虎隊士の墓を訪れる。これがハイゼと白虎隊との最初の出会である。「私はかつて四十七士の墓前に立った時畏敬の念と感激の情に打たれたが、白虎隊の遺骸を葬った、質素な小さな土饅頭を見て一層感激が強かった。」(13) 白虎隊士の墓を前に飯盛山の山主飯盛正利の説明を聞いた時ハイゼは率直に自己の内面を吐露する。「飯盛山上のこの悲しい出来事が四十七士の事件よりも

一層人の心に感動させるゆえんは、若年の少年達が人生の門出において自ら命をすてた点にある。」

(22)、「四十七士の場合は復讐であるが、白虎隊はそんな感情からではなく、若い士としての名誉心がかれらを結びつけた領主並に故郷に対する忠義と愛情とに支配されたのである。」(22)、「かれらの強制されない、全く自由意志による死は、死刑の宣告による死よりもはるかに苦しいのであった。」(22) ハイゼは感動をさそった白虎隊士の死を冷静に分析する。しかし、『忠臣蔵』の赤穂四十七士の場合といい、自刃した白虎隊士19名の場合といい、いずれの場合も極めて東洋的、いな日本的といえる出来事である。「個人」を大切にす西洋的な思想過程を経て来たと思われるドイツ人ハイゼの白虎隊受容の過程が、「感動」するに到った経過が、これだけではもう一つははっきりしない。「かれら少年の霊的ならびに感情的生活の中に入って、かれらの思想過程を了解しかつかれらの感情をそのまま自ら感得しようとの努力に外ならない。従って本事件を批判する考えは自分にはない。東洋人の物の考え方に西洋人流の思想過程をあてはめないで東洋の物の考え方そのものにならうとしたのである。」(21) ハイゼは自己の白虎隊受容の過程を明快に説きあかす。白虎隊士の墓を訪れた当時、滞日10年未満であったハイゼの受容能力はかくも柔軟であったのか。この疑問はいずれ明らかになると思われるので、ここではさらに白虎隊士の死についてのハイゼの分析を継続する。「幼時から受けた武士道的教育に薫陶された少年達は、悲しい運命から脱するためには唯一つの道を考えるのみであった。」(16)、「今やかれらはこの世における生存は何らの魅力をも有しなくなつた。かれらは死を恐れなかつた。大なる心の苦悩に較べると死はむしろ救いであった。……こうすることによって、すでにかの世に旅立たれたであろう領主に対して立派に忠義を立てること信じた。」(17)、「かれらは若人の熱情をもって心身を捧げて領主に奉仕していたから、かれらにとっては領主の幸不幸は同時にかれら自身の幸不幸であり、これ以外には希望も、野心も、政治も、哲学もなかつたのだ。」(26) かくしてハイゼは、白虎隊士の死の根源を、「武士道的教育」に基づく領主への「忠義」に求める。「白虎隊ならびにその他容保公に属したほとんどすべての武士及び郎党を貫く精神こそは、今日一国民の指導の地位にあ

る何人も、自己の援助者及び部下に対し希望するところのものである。自我を忘却した忠義心、犠牲的祖国愛及び部下としての自発的服従心は国民全体の幸福へ導く政治と支配とを容易ならしめるのである。」(30)、「国民全体の幸福へ導く」の個所は首肯するのに抵抗を感じるであろう。第一次世界大戦が終了し、ナチスの第三帝国樹立直前という歴史的背景を考慮したとしても、ハイゼは本気でそのように理解していたのか。しかしここでハイゼの白虎隊分析の妥当性を問うつもりは全くない。ただ彼の感動の根源が、前述の如き白虎隊分析に基づいていることだけは述べておきたい。さらにハイゼは白虎隊の事件に対し興味をもつものが自分以外にも欧州の上流階級にいることを示唆し、例としてムッソリーニをあげる。「ムッソリーニは、……白虎隊忠魂碑を寄贈した。かれはこれによって勇敢なる白虎隊の精神の讃美者なる事を一般に知らしめようと欲したのである。」(38)、「イタリアの強大無比の独裁的政治家としてのムッソリーニもまた、犠牲を惜まない、信頼に足る腹心の部下を必要とする立場にある。」(31)とハイゼはムッソリーニにおける白虎隊受容を分析する。これらのハイゼの分析に従えば、欧州の上流階級にとっては、少くともムッソリーニにとっては、「一般に知らしめる」ことが最も重要なこと、すなわち国民の感動を引き出すことが意味をもつのであって、かれ自身が感動することは別問題なのである。なぜなら「誠実で信頼するに足る忠義な部下から成るかたい根拠を持たないでは、一国民の指導者は、長くその地位を維持することができない。」(31)からである。白虎隊の行為にかれ自身が感動したというハイゼ、「一般に知らしめ」感動をさそおうとしたムッソリーニ。学者と政治家、別な言い方をすれば、一国民と支配者、両者の白虎隊受容の相違を立場の相違と短絡的に結論づけることは可能であろうか。「日本国民にとどまらず、外国においても多数の人がこれら少年の勇敢な行動と忠義に対して尊敬を払っている。」(20)ハイゼのいうこの「多数の人」の中には、欧州の上流階級、少なくともムッソリーニは含まれるのか、あるいは「知らしめ」られた人たちだけなのか。ハイゼ自身は「畏敬の念と感激の情に打たれた」こと、エッツドルフも「非常に感動した」ことを告白しているが、かれらを除く「多数の人」は「尊敬」だけなのか。このこともまた直接白虎

隊士の墓を訪れる機会がなく一方的に「知らしめ」られた結果によるのか。しかしこのことの追求が本論の主たる目的ではないので、以下においては二人のドイツ人、エッツドルフとハイゼを強力に引きつけた白虎隊士の行為をより明確化するため、かれらの思想形成において重要な役割をはたしたと推測される日新館の教育に焦点をあて分析する。

#### 4. 白虎隊士と「日新館」の教育

自刃した白虎隊士19名中伊藤俊彦、津田捨蔵の2名を除く17名までが会津藩の藩校日新館で教育を受けていたことはすでに述べたが、この日新館に代表される会津藩の教育的風土を分析することは白虎隊士の行為の必然性を解きあかす上で大きな意味を有すると思われる。なぜならわずか16、7才で自刃した白虎隊士たちの思想形成において、幼少時よりたたきこまれた教育がいまだ批判能力を有さない時期からのものであるだけに、一層その影響力が大きいと思われるからである。「戊辰戦役九十年に思う」のアンケート回答者にこのことを指摘するものが少なくない。<sup>6)</sup>「当時の道徳感からすれば当然かつ必然の行為とも思われるが、かかる犠牲を出さなくとも、時代の流れを処理する方法はなかったものか、と思わしめます。」(浅沼稲次郎)、「会津若松に行って戊辰のことを思うと、ここに武士道教育の徹底と、精華ということが深く感ぜられる。」(白鳥省吾)、「白虎隊の事蹟は当時の社会道徳の上から最高しかも悲壮な行動であったからこそ私の生涯を通じて、かくも強く私の心をとらえているからだと思えます。」(鈴木茂三郎)、「幼少の頃から、ただ一途に、このような悲惨な道を、立派として教育された日本の悲劇の代表的事実です。」(木下恵介)、「白虎隊十九士は年若くして当時の最高のモラルに雄々しく殉じたがために永く世にたたえられてきたわけだが、私は白虎隊精神が尊いのはその誠実な心であり、勇気であると思う。」(和久幸男)

五代藩主松平容頌治政の天明8年(1788)にいわゆる「天明の改革」が行われたが、その時出された家老田中玄宰の建議に基づき享和3年(1803)5ヵ年の歳月をかけた会津藩藩校日新館が完成する。寛文4年(1664)に開校された私立の「稽古堂」に始まる会津藩の教育は、延宝2年(1674)藩の学問所「講所」の開設、それを改組・拡充し

天明8年(1788)の「西講所」と「東講所」の開校とつづき、日新館の完成でその基礎が形成されることとなる。以後戊辰戦争までの約70年日新館の教育は会津藩の歴史において重要な役割を果たすことになる、いな明治以降においても、例えば第二次世界大戦時などにおいても単に会津一地域にとどまらず日本の広範囲の地域において影響力を発揮したといったらいすぎであろうか。一言で言えば、日新館は徹底したエリート教育の場で、入学は会津藩士の子弟のみに限定・義務づけられ、他の階級の子弟には、例えば飯盛山で自刃した白虎隊士伊藤俊彦のような下級の身分のものには入学の義務がないだけでなく入学すること自体許可されなかった。10才に達した会津藩士の子弟が最初に入学するのが「素読所」(小学、または塾とも称した)で、ここは第四等から第一等までの四階級に分けられそれぞれの階級に被教育可能な年齢の下限が定められている。しかし、考試によって年齢に関係なく進級できるため、多くの者は16才未満で卒業する。素読所を卒業した500石以上の藩士の子弟と、考試をうけ成績・人物優秀な者だけが入学する「講釈所」(大学、または至善堂とも称した)は、下等から中等、上等までの三階級に分かれ、考試によって順次進級し、優秀なものは江戸にあった昌平黌への留学が許可された。以上が日新館の歴史と学制の概略であるが、白虎隊士の思想形成の観点から日新館をとりあげる場合、むしろ日新館がいかなる目的のもとにいかなる教育を実施したかを問題にせねばならないであろう。

日新館の教育目的に言及する前に、他藩に例をみないと言われる会津藩教育の特色の一つ「遊びの仕」についてまず述べたい。これは、日新館入学前の6才から9才までの子供たちを対象とする校外生活の指導組織で、地域別に組織された約10人を一組とするいわば「遊び仲間」の集団である。門地、階級による差別は全く存在せず、子供たちは午前中は最寄りの寺小屋などで勉強し、午後は晴雨にかかわらず一ヶ所(当番の家)に集合し、年長者である仕長の指導のもと日がくれるまで遊ぶ。単独で勝手に遊ぶことが許されなかったのは当然のことであるが、さらにかねらの行動を厳しく規制したのがいわゆる「お話」といわれた八カ条からなる仕の掟である。この掟に違反した者には、「無念」<sup>むねん</sup>、「竹篋」<sup>しっぽい</sup>、「手炙り」<sup>てあぶり</sup>、「雪埋め」、そ

して最も厳しい「派切れ」(絶交)といった制裁が行われた。以下に仕の掟である「お話」八カ条を引用する。<sup>7)</sup>

1. 年長者のいうことにそむいてはなりません。
2. 年長者にはおじきをしなければなりません。
3. 虚言をいうてはなりません。
4. 卑怯な振舞をしてはなりません。
5. 弱い者をいじめてはなりません。
6. 戸外でものを食べてはなりません。
7. 戸外で婦人と言葉を交へてはなりません。
8. ならぬことはならぬものです。

注目すべきことは、「ならぬことはならぬ」に収斂されている如く、条項がすべて「禁止」を定めていることである。批判精神をもたないわずか6才の頃から厳しく禁止事項のみを、それも家庭ではなく同年輩者の団体生活の中で教えこまれ、素読所、講釈所とすすむにつれ「禁止」に「自己規制」が加わり、その結果自己の意志で選択できる範囲は極めて限定されることになる。生のみならず死をすら自己の意志とは無関係の次元で決定されることになるのは極めて必然的な結果といえるであろう。従って白虎隊とは、このような「禁止」の教育の上に咲いたあだ花であり、自刃といわれるその死も「自」の入る余地などあったか疑問である、という解釈も可能かと思われる。ドイツ語で教育(Erziehung)が個人の能力を「引き出す」ことを意味することでもわかるように、個人の能力を最大限生かすことを主眼とした教育を受けたドイツ人二人エッツドルフとハイゼが、ひたすら「個人」を否定することに重点をおいた教育で成長した白虎隊士の行為になぜ感動したのか。自己のないものにひかれたといえば簡単であるが、なぜかすっきりしないのが実状である。

さて「お話」八カ条にもどり特徴を分析すると、長幼の序と男女の区別(差別)に対して厳格なことが目につく。このことは、おそらく藩祖保科正之が寛文8年(1668)に定めた「家訓15カ条」が原点になっているものと思われる。関連する「家訓の一部を引用する」<sup>8)</sup>

- 一、武備は怠るべからず、士を選ぶを本となすべし、上下の分乱るべからず。
- 一、婦女子の言は一切聞くべからず。
- 一、主を重んじ、法を畏るべし。

同様のことは、素読所の教育目的を定めた文化10年(1813)制定の素読所の條令、及び講釈所の教

育目的を定めた文化7年(1810)制定の講釈所の條令にも見い出される。兩條令の第一条を以下に引用する。

一、学校は孝悌を本とし、人々受くる所の徳をなし、材を達し、実用の器を成す可きためなり。諸事師表の教に隨い、孝敬を主とし、年月を経て時を失わず徳業を進むべし。(素読所)

一、身を修め徳をなすは、学問の要務なり。常に章句の間に拘らず、道の大本を会徳し經濟に心を委ね互に信義を以て切磋し、忠義を以て本とし、修身治国の道に志し、大器をなさんことに務むべし。(講釈所)

なお以下の条文は兩條令に共通したものである。

一、長幼の序を專にし、順序は尊卑に拘わらず年令の順序に隨ひ、……。

目黒栄『白虎隊の錬成、鶴城の教育実践』によれば、「素読所と講釈所との目的について比較するに、前者は実用の器となることを目標としているが、後者は治国平天下の大人物となるべき修養を期待している。」<sup>9)</sup>という。

これらの教育目的を達成するために用いられた教科書が、『会津論語』とも呼ばれた『日新館童子訓』である。これは、幼年時代の教育を重視したといわれる五代藩主松平容頌自身が筆を執ったとされ、上下二巻から成り立っていて、日新館の素読所のみならず一般家庭でも広く読まれたものである。著者は仮名まじりの平易な文章で「孝道の大事」を中心とした教訓的な内容をまず述べ、ついでその実例として会津を中心にわが国の歴史に材をとったエピソードを紹介し読む者の興味をひき出すよう工夫している。目黒栄によれば、「内容は主として藩祖正之公の愛読せられた『小学』を範とし、会津伝統の精神である忠信孝悌の道を、日常生活の実際に就て指導し実践せしめる教科書であった。」<sup>10)</sup>という。この『日新館童子訓』の教えを藩内一般に普及せしめるため、実践項目の廉々を抜書したものが、文化2年(1805)に発布された17カ条からなる『幼年者心得の廉書』<sup>カドガキ</sup>である。例えば、「その一」を引用すると、「毎朝早く起き、手洗ひ、口すすぎ、櫛り、衣を正して父母の機嫌を伺ひ、年令に応じ、座中を掃除し、客の設け等致すべし。」<sup>11)</sup>とあり、以後「その十七」まで「父母への孝」がくりかえし説かれている。かくしてわずか6才で「ならぬことはならぬ」と教えられた子供たちは、最低単位の家を形成する父母への

孝にはじまり、最大単位の藩の長である「君」への忠への道程を全く抵抗なく歩んでいくことになる。さらに各藩が互いに孤立させられていた封建時代という歴史的背景が加われば、例えば白虎隊士が自刃したことなどは、決して特異な現象ではなく、必然的とすら言える現象なのであろう。以下においては、白虎隊士の行為に感動したエツドルフやハイゼをはぐくんだドイツの教育について言及し、合わせて白虎隊士の受けた日新館の教育との関連をさぐる予定である。

## 5. ドイツの教育

古代ローマの歴史家タキトゥスは、その著書『ゲルマニア』でゲルマン民族の規律重視の伝統を高く評価したが、この伝統は長い地方分権の歴史を経た今日のドイツにおいても継承されている。例えば教育についても、各州ごとに制定された州憲法の規定に基づき、各州の文部省がかなり詳細に学校教育の目的など学校規則を定めている。1953年制定のバーデン＝ヴュルテンベルク州憲法は教育目的を以下の如く規定している。「十一項 すべての若き人間は、出身あるいは経済的狀態にかかわらず、自分の能力にあった教育への権利を有する。十二項 青少年は、神への畏敬において、キリスト教的隣人愛の精神において、人間の連帯性(兄弟のような関係)および平和への愛、民族と郷土への愛において、倫理的、政治的責任、職業的、社会的確証、および自由で民主的な志操へと教育されなければならない。」<sup>12)</sup>この憲法の顕著な特徴は、キリスト教を基本とする精神教育重視の姿勢で、この姿勢は、例えばバイエルン州憲法にも認められる:「神に対する畏敬、宗教的信念の尊重」<sup>13)</sup>これらの州憲法と江戸時代に各藩が実施していた例えば日新館教育などを比較すると興味深い。儒教を基本とした道徳的訓練、それも統治者養成のための道徳的訓練という実用的性格が強い藩教育は明らかに州憲法の精神とは異っている。

さて州憲法に基づき確立された学校制度は、各州首相が集まり署名した1955年の「デュッセルドルフ協定」(Düsseldorfer Abkommen)、1964年の「ハンブルク学校協定」(das Hamburger Schulabkommen)を経て現在のような制度となった。全生徒が共通なのは、6才から4年間の「基礎学校」(Grundschule)だけで、10才からは実務

的、技術的、学問的といった類型に基づき進学先が分類される。すなわち職人（マイスター）養成を目的とする5年間の「ハウプトシューレ」(Hauptschule)、中間技術者養成を目的とする6年間の「実科学校」(Realschule)、大学進学をめざす9年間の「ギムナージウム」(Gymnasium)。そしてさらにそれぞれのコースに職業学校、専門学校(専門学校)、大学がつづく。以上が現在の西ドイツにおける学校制度の概略であるが、わずか10才で人生の方向が定まり一見苛酷な制度という印象をうけるであろう。しかしマイスター制度が確立しマイスターの地位と収入が必ずしも低くないこと、大学進学が「どこの大学を出るか」ではなく「何を学ぶか」にあることなど種々の理由により、ドイツ人自身は、我々日本人が考えるほど現在の制度に矛盾を感じていないように思われる。

ドイツの教育の歴史を概観しその特徴を記すと、古代ギリシア以来の「知識を知識として愛する教育」、すなわち「目的から自由な教育」という理想主義が潮流であったと思われる。例えば、シラーが1789年イェナ大学教授就任の際に行った「パンのための教育」を否定する演説などその典型といえる。もう一つの特徴は、キリスト教精神に基づく「個人主義」が教育の基本原理になっていることである。そこにおいては「忠君愛国」の理念は当然無縁となっている。これらの潮流が一時的であれ変化したのが、1933年から1945年まで政権を担当したナチスによる国家主義的、民族主義的教育である。かれらは教育を、「民族全体を力の政治という目的へと統一的にむけていくための努力」としてとらえ、具体的には「おもに学校の外で多くは特別の団体や組織において、一部では放送、映画、新聞、その他の宣伝手段のような近代の方策を通して、社会教育として遂行された。青少年は学校のほかに特別の青少年組織の中でも把握された。」<sup>14</sup> 明らかに目的のための教育、それも支配者による統治のための教育といえる。どことなく日新館の教育との類似が感じられる。エッツドルフがドイツ大使館付書記官として会津を訪れたのが1934年、ハイゼが『独逸人の見たる会津白虎隊』を執筆したのが1930年、ヒトラーが政権を獲得したのが1933年、二人はナチスとは無縁の人であるが、歴史の流れからも無縁でありえたのであろうか。

## 6. ま と め

飯盛山で自刃した白虎隊士の行為に程度の差はあれ心を動かされないものはまずないであろう。約半紀前の昔にも、エッツドルフとハイゼのドイツ人二人が白虎隊の行為に強く心を動かされ、一方は「ドイツ記念碑」を寄贈、他方は『独逸人の見たる会津白虎隊』という著書を残している。また「戊辰戦役九十年に思う」のアンケートに回答を寄せた人たちの多くも率直に白虎隊士の行為に強く心を動かされたことを表明している。しかし動かされた心の内は必ずしも一様でないように思われる。エッツドルフとハイゼ、何がかれら二人を動かし白虎隊士と結びつけたのか。大使館付書記官と一学者にすぎなかったかれらには、ムツリーニのように統治上の理由から国民に白虎隊士の行為を知らしめる必要は全くなかったはずである。

高浜虚子は、「これからの指導者はよほど心して青年に対さなければなりません。しかし、白虎隊の心事を悲しむことは誰も同じことでありましょう。」<sup>15</sup> とアンケートに回答を寄せた。奈良本辰也は、「少年たちをそうした行動に駆りたてた教育の、重い鎖を断ち切れなかったくやしき」<sup>16</sup> ゆえに涙する。いずれにせよ解明のポイントは「教育」と思われる。エッツドルフやハイゼとの関係も含めて、白虎隊士を自刃に導いた「教育」の意味をあらためて問うてみたい気がする。

### [注]

- (1) 大久保龍著『白虎隊とその教育』、第一出版協会、昭和18年、2ページ。
- (2) 山口弥一郎著『白虎隊物語』、飯盛正智発行、昭和62年、19ページ。
- (3) 吉川英治「新・平家今昔紀行」、『週刊朝日』、春季増刊号、昭和28年、156ページ所収。
- (4) 会津若松市役所編『戊辰戦役九十年祭』、昭和32年、46ページ。
- (5) エル・ハイゼ著『独逸人の見たる会津白虎隊』、飯盛寿々子発行、昭和17年、9ページ。  
以下このテキストよりの引用はすべて引用文の後にページ数を記した。
- (6) 前出『戊辰戦役九十年祭』、35ページ～50ページ。
- (7) 前出『白虎隊とその教育』、106ページ。
- (8) 前出『白虎隊とその教育』、34ページ。
- (9) 目黒栄著『白虎隊の錬成、鶴城の教育実践』三成

社，昭和18年，70ページ。

- (10) 前出『白虎隊の錬成，鶴城の教育実践』，74ページ。
- (11) 前出『白虎隊とその教育』，90ページ。
- (12) 大西健夫編『現代のドイツ，学校と教育』，三修社，1984年，33ページ。
- (13) 沖原豊編『世界の学校』，有信堂高文社，1981年，47ページ。
- (14) H・ヴァイマー，W・シェラー著『ドイツ教育史』，黎明書房，昭和54年，248ページ～249ページ。
- (15) 前出『戊辰戦役九十年祭』，45ページ。
- (16) 奈良本辰也編『日本の藩校』，淡交社，昭和45年，87ページ。